Ⅶ　おわりに

「生きて働く力」を育てる中学部の立場から研究の視点である「からだづくり」について、本年度の研究をまとめてみた。研究の中心は調査研究と来年度よりの実践に対する、仮設について見通しを持つことであった。個人研究の中での指導の実践は、そのためのものであってわずか３～４カ月の実践で何らかの結論を出すことは勿論、来年度への見通しを持つことすら難しいと思っている。今後、何度も仮設はもとより取り組みの軌道を、修正しながらの摸索が続くであろうことが予測できる。

例えば、「からだづくり」について、いかに具体的指導であっても（運動や遠足的行事をどれだけ充実させても）それが対象児の気力に支えられていなければ、その場かぎりで定着しないという考え方。生活のリズムを確立し動きを引き出して生活化することがからだづくりで、体育の充実で障害児のからだづくりは不十分などという考え方もある。

やはり長い時間をかけて検証する必要があると思うが、今の段階で、そこまでは考えていない。何はともあれ私達の研究は学校生活だけの問題ではなく、卒業後の生涯に渡っての問題なのである。私達の研究は、生涯を通して生活の中で定着しているような「からだづくり」でなければ、何の意味もないことを念頭においた取り組みを心がけていかねばならないと考えている。